

2026 年 7 月 1 日

脱炭素をテーマに本気で社会実装を目指す 共創型ビジネスコンテスト 第 9 回「デカボチャレンジ 2026 Spring」に参加！

共創型ビジネスコンテスト「デカボチャレンジ 2026 Spring」にて
ー7 月の大規模体験型イベント「TOKYO GX ACTION MUSEUM」へ、
提案の知見を活かす

東京都は、2035 年に 2000 年比で温室効果ガス排出量 60%以上の削減及び 2050 年「ゼロエミッション東京」の実現に向けたプロジェクト「TOKYO GX ACTION」の一環として、脱炭素社会の実現に向けて企業と学生が共創するビジネスコンテスト「デカボチャレンジ 2026 Spring」（主催：Earth hacks 株式会社）に、「TOKYO GX ACTION 2026 実行委員会（以下、実行委員会）」として参画。5 日間にわたるプログラムの最終日、実行委員会が設定したテーマでアイデアを提案したチームが、学生投票により決定する「学生大賞」を受賞しました。実行委員会が学生たちに投げかけた「問い」の背景から、受賞提案「TOKYO みつばち大作戦」の具体的な内容、そして 7 月に開催予定の大型体験型イベント「TOKYO GX ACTION MUSEUM」への展望までを一連のストーリーとしてお伝えします。



■ 「TOKYO GX ACTION」からの「問い」

TOKYO GX ACTION はこれまで、2024 年 10 月 13 日、14 日に開催の「TOKYO GX ACTION BEGINNING」（東京国際フォーラム／来場者 1 万人）で GX を「知る」段階を、2025 年 5 月 17 日、18 日に開催の「TOKYO GX ACTION CHANGING」（東京ビッグサイト／来場者約 6.5 万人）で GX を「体験する」段階を経てきました。次なるフェーズは「行動を促す」こと。

しかし、「第六回 生活者の脱炭素意識&アクション」調査（2024 年 10 月 15 日－16 日実施、対象：全国 15-79 歳男女 計 1,442 名）によれば、脱炭素に向けて意識的に行動している人は調査回答者全体の約 3 割にとどまり、特に 20～40 代では 25%前後と低い水準です。こうした現状を踏まえ、今回のデカボチャレンジで、実行委員会からは以下のテーマを学生たちに提示しました。

かえていこう。"GX"のイメージを、毎日の行動を。

東京の若者がワクワクしながら参加できる新しい『GX アクション』の

プロモーション戦略。

「脱炭素」や「カーボンニュートラル」という言葉の認知度は 9 割を超える一方で、若年層ほど「具体的に何をすればいいかわからない」「自分一人の行動では社会を変えられない」という意識が強いことが分かっています。とりわけ 10 代では行動しない理由として「過激な思想家・意識高い系だと思われたくない」という声が全年代の平均割合を約 8～9%も上回る結果となっており、GX の「自分ごと化」を阻む心理的ハードルの高さが浮き彫りになっています。

この課題に対し、「GX を我慢や義務ではなく、楽しさや身近な実感から始められるものにするにはどうすればよいか」——それが、実行委員会から学生たちへの問いかけでした。

■ 受賞提案「TOKYO みつばち大作戦」の全容

学生大賞を受賞したのは、実行委員会からのテーマで提案した 3 チームのうち「TOKYO みつばち大作戦」を提案した C チーム。環境課題に対する若者の「自分ごと化の難しさ」に正面から向き合い、ミツバチという身近な生き物を切り口にした独自のプロモーション施策です。

着眼点：「CO₂削減」では届かない。「ミツバチを救う」なら届く。

提案チームは、「CO₂を何%削減」「気温上昇を 0.0004℃抑える」といった数値では若者にとって自分ごと化が極めて難しいという課題を出発点としました。そこで注目したのが、地球温暖化によって深刻な影響を受けているミツバチの存在です。

温帯植物の 78%はミツバチの受粉に依存しており、マンゴー、アボカド、イチゴなど日常的に食卓にのぼる食材の多くが、ミツバチなしには収穫できなくなります。1950 年以降、世界のミツバチは約 50%減少。温暖化による開花時期のズレや天敵ダニの増殖がその主な原因です。

「世界の CO₂を減らす」という抽象的なゴールを、「ミツバチを救い、私たちの食卓を守る」という身近で感情に訴えるストーリーに変換することで、GX アクションの意味を実感できる仕組みを設計しました。



施策の三本柱

①「はち P（ハチポイント）」制度——日常の GX 行動を可視化

電車で移動する、マイボトルを使う、エコバッグで買い物をするなど、日常の脱炭素行動を「救えるミツバチの数」に換算して可視化するポイント制度です。専用の Web アプリ上で行動を記録するたびに「はち P」が貯まり、自分の行動がミツバチ何匹分の貢献に相当するかをリアルタイムで確認できます。

さらに、各アクションに対して「東京都の同年代（15～24 歳）の〇〇%がこのアクションを実践中」とアプリ内で表示することで、「みんなもやっている」という社会的証明を提供。「自分一人がやっても意味がない」という諦めの意識を払拭する設計になっています。

② 体験型イベント「ハラカド TOKYO みつばち大作戦」——原宿から発信

原宿の商業施設「東急プラザ原宿『ハラカド』」を舞台に、館内の各フロアでデカボ行動（食品ロス削減・詰替え品購入・エシカル商品選択など）を実践しながら「はち P」を貯め、屋上庭園でミツバチへの貢献を実感できる体験型イベントを提案。屋上では養蜂場の見学、蜂蜜の飲み比べ体験に加え、「ミツバチがいなくなった世界線のスーパー」という展示を通じて、ミツバチと食の結びつきを体感できる空間を構想しました。

ハラカドは東急不動産が GX 時代の新たな拠点として位置付ける施設であり、若者が日常的に訪れる原宿という立地が、「意識高い系」ではない自然な接点での GX 体験を可能にします。

③ 短期のインセンティブから中長期の行動変容へ——二段階の戦略設計

提案では、若者を「GX アクションを起こしていない層」「仕方なく行動している層」「ワクワクしながら行動している層」の三層に分類。まずポイント制度や体験イベントといったインセンティブで行動のきっかけをつくり（短期）、成功体験を通じて主体的な行動変容につなげていく（中長期）という二段階の戦略を設計しました。丸の内ハニープロジェクトや銀座ミツバチプロジェクトなど、東京都内で既に展開されている都市養蜂の取組との連携も視野に入れた提案となっています。

■ 学生大賞受賞の決め手

最終日の 3 月 16 日（月）、日経ホールで行われた決勝プレゼンテーションにて、予選を通過した 8 チームの中から学生投票により「学生大賞」が決定。実行委員会のテーマで提案したチームが選ばれました。

受賞の決め手となったのは、以下の点です。

課題の本質への切り込み：CO₂削減率や気温上昇といったマクロな指標ではなく、「ミツバチの減少→日常の食卓への影響」という具体的かつ感情に訴えるストーリーラインで、GX の「自分ごと化」を実現した点。

実現可能性の高い施策設計：提案にとどまらず、実際に Web アプリのプロトタイプを開発し、ハラカドの現地視察に基づいた具体的な会場設計図まで作成。フィジビリティの高さが評価されました。

短期と中長期をつなぐ行動変容の導線：ポイント制度による短期的な参加動機と、成功体験を通じた主体的な行動変容への移行を明確に設計し、一過性のイベントに終わらない持続的な仕組みとして構想した点。

■ TOKYO GX ACTION 2026 実行委員会コメント

短時間の中で、各チームが課題の深掘りから実現可能性を踏まえた解決策まで検討し、熱意あるプレゼンテーションを行っていただいたことに感銘を受けました。特に受賞チームの提案は、若者が GX を「自分ごと」として捉えるための視点の転換が見事であり、ご提案いただいたアイデアは今後の「TOKYO GX ACTION」のプロモーション戦略に活かせるよう検討させていただきます。（TOKYO GX ACTION 2026 実行委員会事務局）

■ 審査員総評

今回のデカボチャレンジでは、当初の脱炭素という枠にとどまらず、インクルーシブな社会の実現や消費行動の変化など、多様な社会課題へと議論が発展している点が特徴的でした。学生ならではの視点から生まれた生活者インサイトやアイデアは、企業にとっても新たな価値創出につながるものであり、本プログラムが企業と次世代をつなぐ共創の場として機能していることを実感しました。（三井物産株式会社 エネルギーソリューション本部 Sustainability Impact 事業部 新事業開発室長 五味智治氏）



■ 「デカボチャレンジ 2026 Spring」開催概要

日程：2026 年 3 月 6 日（金）、7 日（土）、13 日（金）、14 日（土）、16 日（月）

主催：Earth hacks 株式会社

対象：2027 年～2030 年卒業予定の大学生・大学院生

表彰式会場：日経ホール（千代田区大手町 1 丁目 3-7）

■ デカボチャレンジ 2026 Spring 各賞結果

学生大賞：TOKYO GX ACTION 2026 実行委員会チーム（「TOKYO みつばち大作戦」）

審査員大賞：東京建物チーム（八重洲・日本橋・京橋エリアにおける新たな価値創出をテーマに提案）

審査員奨励賞：リコー×リコーブラックラムズ東京チーム（障がいのある方が地域社会の一員

として関わり続けられる社会の実現をテーマに提案)

<参加企業・団体（五十音順）>

株式会社商船三井／TOKYO GX ACTION 2026 実行委員会／東京建物株式会社／株式会社博報堂・株式会社博報堂 Gravity／三井物産株式会社／UCC 上島珈琲株式会社／リコー×リコーブラックラムズ東京

<審査員（五十音順）>

五味智治（三井物産株式会社 エネルギーソリューション本部 Sustainability Impact 事業部 新事業開発室長）／清水佑介（Earth hacks 株式会社 Chief Creative Officer）／中村勇介（株式会社日経 BP 日経クロストrend編集長）／バブリー（竹野理香子／合同会社 CGO ドットコム総長）

■ 「デカボチャレンジ」について

デカボチャレンジは、日本を代表する企業・省庁・自治体が Z 世代の現役大学生とともに「脱炭素（Decarbonization＝デカボ）社会」の実現につながる新規事業の創出を目指す、社会課題解決型の共創ビジネスコンテストです。各参加団体から与えられたテーマに対し、5 日間にわたり企業担当者と学生が対話を重ね、実現可能性の高いアイデアを共創していく点に特徴があります。2026 年 3 月時点で 16 回開催し、延べ 120 社・1,400 名以上が参加しています。

ウェブサイト：<https://co.earth-hacks.jp/decachalle/>

■大規模体験型イベント「TOKYO GX ACTION MUSEUM」を 7 月に開催！

東京都は、2050 年「ゼロエミッション東京」の実現に向けて“グリーントランスフォーメーション（以下 GX）”を加速させる「TOKYO GX ACTION」の取組の一環として、「TOKYO GX ACTION MUSEUM」を開催します。

エネルギーや脱炭素を身近なテーマから理解できる内容となっており、テクノロジー、ドライブ、フード、アート＆ファッション、エンターテインメントの 5 分野で、展示やワークショップ、ステージイベント等を通じて GX や気候変動対策について体験型で楽しく学べるイベントとなっています。また、東京ビッグサイト周辺で行われている ABB FIA

フォーミュラ E 世界選手権「2026 TDK Tokyo E-Prix」と連動した次世代のモビリティの展示も行います。

夏休みの自由研究やお出かけに、ぜひ大人から子どもまで皆さまでご参加ください。

【開催日時】 DAY1 2026 年 7 月 25 日(土) 11:00～20:00

DAY2 2026 年 7 月 26 日(日) 11:00～20:00

【開催場所】 東京ビッグサイト 西 1～4 ホール

[「TOKYO GX ACTION MUSEUM」を開催します！|6月|都庁総合ホームページ](#)

<https://tokyo-gx-action.jp/event2026/>

■ 「TOKYO GX ACTION」について

東京都は、2035 年に 2000 年比で温室効果ガス排出量 60%以上の削減、また、2050 年「ゼロエミッション東京」の実現に向け、化石燃料からクリーンエネルギー中心の社会へと転換する GX の取組を加速させていきます。「TOKYO GX ACTION」は、都民一人ひとりが GX を理解し、行動を変えていくことを目指し、年間を通じて最新の GX 技術などを広く発信していくためのプロジェクトです。

公式ホームページ：

<https://tokyo-gx-action.jp/>

X（旧 Twitter）：@tokyo_gx_action

Instagram：@tokyo_gx_action

